

目 次

擬香山模草堂記について……………	1
擬香山模草堂記について……………	21
付 成簀堂文庫本作文大体の原本は源通親の撰か	
源通親について—その人と作品……………	47
『作文大体』における「諸句ノ体」をめぐって……………	83
平安朝期におけるいわゆる「織物」について……………	111

『枕草子』と衣生活	137
-----------	-----

平安文学と服飾	147
---------	-----

『蜻蛉日記』の歌と『源氏物語』の歌についての覚え書	179
---------------------------	-----

——『蜻蛉日記』作者の果たした役割——

「ちかの浦」か「ちかの島」か	211
----------------	-----

——『蜻蛉日記』巻末歌集の問題について——

所収論文掲載誌一覧	221
-----------	-----

あとがき	225
------	-----

擬香山模草堂記について

はじめに

「擬香山模草堂記」は成簀堂文庫本「作文大体」の巻首にしろされている約一千余字の漢文である。周知のように、成簀堂文庫本の「作文大体」は中御門宗忠（康平五年（一一〇六）〜永治元年（一一四一））の撰であるが、なぜ、この山荘の記が巻首に付されているのか、またこの巻物は現在お茶の水図書館に貴重本として所蔵されているが、かつては徳富蘇峰氏が所持されたもので、それ以前の伝来事情についても不明である。高さ二八糎、長さ五二糎の和紙が五十枚ほどつなぎ合せられており、その最初の三枚の中にこの作品と、そしてそれにつづく「雑筆見聞自抄」という二首の対句が収められているのである。両者の間には四行分ほどの間隔がおかれてある。

この「擬香山模草堂記」は一行十八字ないし二十三字詰、五十二行からなり、その終りに七律一首が